

17世紀イングランド常備軍論争(9)

藤原 浩一

A

Short Vindication

O F

Marine Regiments,

In Answer to a Pamphlet, Entituled,

*A Letter to a Member of Par-
liament, concerning the Four
Marine Regiments.*

L O N D O N,

Printed for *A. Baldwin*, near the Ox-
ford-Arms Inn in *Warwick-lane*, 1699.

海兵連隊についての短い弁護

「一般に海兵隊と呼ばれている四連隊に関して、ある下院議員への手紙」というパンフレットに対する返答として

千六百九十九年

ロンドン、ウォーウィックレーン、オクスフォード・アームズ・イン近くのボールドウィン出版

(3)

海兵連隊についての短い弁護

人間というものは独自の意見を持つあらゆる著者の気ままな中傷を受けるものなので、特別に憤慨すべき唯一の不運は、彼が最悪の人の手にかかってしまったときです。海兵の運命がそのようなものであることは彼の本のあらゆる頁に顕著な下劣さ、矛盾、及び虚偽から明白です。

この紳士は作品において一貫して、お似合いの厚かましきでこれらの連隊が国民にとって無益な負担であり、海軍にとってやっかいものであり、王国の自由にとって危険だと論証しようとしています。

この非難は実に厚かましく、もし彼の主張にあらゆる種類の理性的証明や事実関係が欠落している、という我々にとっては小さな優越点となる事実がなければ、我々は絶望的な状態に陥ってしまっていたことでしょう。

(4)

このパンフレットの著者はなんの躊躇もなく（海兵）士官は滅多になんの義務も果たすことがないと断言され、さらに士官とその部下たちは余分なものであり、艦船の全乗組員にとって無益であり、またきわめて重い負担となると主張しておられます。アドミラルティ¹の委員諸兄は艦隊の乗り組みを離れるとつねに海兵連隊長に部下の分遣を命令されます。士官もそれに比例した人数が定員として乗り組まされ、つねに艦船に必要な全船員定数の一部と見なされます。そして彼らは多数の水兵より給与が低くされています。すなわち有能な水兵の月給が二十四シリングであるのに対して海兵は十八シリングにすぎません。そして少なくとも彼らは等しく有用だとされていますし、私は一般の船長と同様に提

督たちもしばしば認めていることを耳にしたことがあります。全乗組員を水兵とするよりはむしろ乗組員の四分の一を海兵としたい。というのは、海兵が大砲とか小銃の部署に配置されたり、舷窓で見張りとして配置されたとしても有事に際して彼らは常に命令に対してよほど従順であることがわかったからです。一方、有事に際して水兵はそれほど命令に従順でもありません。海兵がつねにより厳しい規律を守っている一方で水兵は頻繁に任務を解かれたり、より大きい自由を享受し、多様な勤務形態になじんでいるからです。

しかしここで、彼はただちに我々のすべての期待をたたきつぶすために反感と経済性について言及しておられます。そして水兵と地上兵との異なる気質についてとても快活に述べておられます。また、国家がそれに同意するようなことがあったとしても、安全に実施することは不可能だと主張されています。彼はあるときは我々を海兵とし、それから再び我々を陸上兵士とします。そして実際彼はきわめて創意に富んでいるので、彼が我々にさせようとするものに何でもさせられてしまいます。

(5)

我々に知らされる唯一の例はフランシス・ホイラー卿²の西インド諸島遠征について異議を唱えることです。それは西インド諸島において乗船させられた歩兵連隊のことで、この著者の推論の技法をもってしても海兵には当てはまりません。海軍士官は服従を拒絶する海兵を監禁する権限を持ち、海兵に対して絶対的支配権を持ちます。

オアフォード卿³によって指揮された海峡艦隊と、その遠征に参加した地上軍連隊はさらにすぐれた合意の幸運な例であり、それはむしろ望まれることです。我々が同様な行為を続けることは、彼がきわめて危険な結果をもたらすと述べておられる、その正当な理由を欠いた甚だしい意見の不一致に完全に終止符を打てるかもしれません。

彼は我々に対して強く主張されています。すなわち、我々は追加負担となる海員を養成する状況にはなり得ないし、平和で安全な時期に養成所の存在の余地はまったくないと。しかし自分自身の確信以外にはまったく支持されていない彼の意見は明白な事実を超えることがなく、概念のデモンストレーションにすぎないとみなされることを私は望みます。というのは国王の船は戦時においては必要不可欠であり、王国の貿易面にしばしば遅れを生じ、損害を与えました。平和な時代には必要性が反対の側面にたいして優勢となるでしょう。そしてその長く危険な航海が様々な天候による病気の発生やそのような人生につきものの数え切れない事故によって常に人員が減少し、そのような遠隔地においてただちに我々が必要とする物を自覚させることは明白です。そして海兵がその適切な補充となることは否定し難い事実です。この著者がよく知っておられるような言い方をされています

が、もう少しばかり海軍のコミッショナーをよく知っておられたら、海軍の記録簿からこれらの連隊がひどい差別に苦しみ失望して勤務していたときでさえ、多数の水兵は海軍勤務にふさわしいとして、そのようなひどい差別や失望するような勤務から免除されていたことが明らかとなるでしょう。そして彼らが最初の設立に際して奨励され、支持されていたなら、毎年千人がその中から有資格者として引き抜かれたであろうと確信しています。

(6)

そればかりでなく、カレーからの侵略に脅されたとき、この著者がまったく無価値な物と見なしている、まさにその海兵こそが戦闘準備を整え、非常に必要であることが分かりました。当時彼らがいなければ艦隊の人員を急速に充足する仕事に携わっていた士官に耐え難い困難を強いることとなっていたでしょう。彼は再び彼特有の穏当な言い回しで我々を非難しています。すなわち我々自身が海上勤務にふさわしくなるよりは水兵に地上軍となるようにそそのかしたり、また我々が募兵して徴募された人々を名簿に登録すれば一人当たり四十シリングを受け取ることになるという責め立てています。

彼がいつもの率直さでうまく成し遂げているこの真実では、海兵の半分は常に航海に出ており、そして残りはいつも彼らと交代する準備ができています。もしくは他のどのような遠征にも一時間で乗り組めます。そしていつも海上勤務を自分たちの適切な作戦行動と義務の場所であるとみなしています。水兵の給与は一ヶ月あたり二十四シリングで海兵は十八シリングだと言われています。それは海兵隊勤務を自分たちが希望して選ぶ傾向があるに違いありません。そしてこの著者によって五頁で示されている陸兵と地上での勤務を彼らが自然に望むことにより、海兵隊士官にとって徴募された水兵を自分たちの中隊にリクルートすることは非常に容易な業務でしょう。彼らは最初は海軍士官によって徴募され、実際には彼らの保護下におかれています。そして彼らは疑いなく自ら進んで（前に言及した反感のために）自前で海兵隊士官に喜んで従うでしょう。というのは海兵隊士官は陸軍士官ほど徴募する力を持っていないからです。

(7)

この紳士は断固とした態度でしきりに自分自身の反対意見を述べておられます。それから徹底的にそれらに答えて、それから自分の理由を応答不可能なものにして彼は非常にしばしば自分の人間性、つまり彼の善良さではなく、誤りやすさをさらけ出しています。その点については我々は彼の責任を免じてあげなければなりません。国家の騒乱は改革者の

寛容さによって損害を受けることはありません。

ここでもしその主題がさほど重大ではないというならば私にとっては実に楽しいことでしょう。水兵はつねに甲板を守るため、そして敵に痛手を負わせるための小火器の取り扱いに勝っていると彼は言うておられます。甲板を守り、規則正しく砲撃ができると言いたいのでしょう。速く規則正しく砲弾を詰め、砲撃したり、よく訓練された中隊と同様に自分たちの身を守りながら命令に従って規則正しく前進したり、後退したりするためにはヒバリを射撃することで最もよく習得されるものだとおっしゃりたいのでしょう。これはきわめて滑稽なことなので私はこの殿方がその控えめな提案の最初の成果を我々に示してください、恥じていただくことを望みます。

そうしてくださることを確信して私はあえて彼に申し上げます。海軍の司令官が、水兵に携帯武器の使用を精進させて習熟させることは十中八九できないであろう、と愚痴をこぼしていることを知っています。この事実が海兵の必要性をほとんど反対できないものにしていきます。

私が思うに、これらの海兵が海上で試みられた反乱を防ぐのに役立ったという一つの例を証明することは可能です。そして彼らがそのような面で有益でありうる非常に多くの理由があります。すなわち常日頃の規律がより強い義務感を与え、善良な士官へ最高の配慮を示しているからでしょう。それが彼らの武器が常に船の最後部に置かれている理由なのだ聞いたことがあります。

(8)

彼が示しているコーク⁴とかキングセイル⁵の攻撃の例に関しては彼にすれば非常に無益な海兵（この殿方の目的には不運でしたが）が、成功に大いに貢献したと言えるでしょう。その結果、我々は、彼の主張があまりにも事実とかけ離れていると結論を下さなければなりません。

現在、海外に海兵連隊が千人以上おり、そして残りは彼らが配属されていた提督の誰にでも聞いてみる事ができると信じています。そうすれば、この著者とは異なる報告に触れることになるでしょう。彼はコアにきわめて立腹しておられるようですが、兵士についてはあきらかに無知です。

海軍の規則と対立するという難点は勤務に海兵が有益であると思われれば消滅します。そうでなければ彼が知っている委員は委員会の能力のためにまともな約束はできないでしょう。

偽りの兵員名簿を作成するなどして、海兵隊の士官が海軍の士官の規律を墮落させると

いうことは証拠のないスキャンダルです。彼らが今までそのような告発をされたということは聞いたことがありません。この正当性を擁護するためにはこの著者の全力を必要とします。なぜなら、船内の海兵は常に海軍の点呼、及び検査の下にあるからです。

彼は海兵が国王の海軍工廠で役立つという意見に反対するあらゆる事柄を並べ立てながら返事はしないと述べています。返答することは我々がつねに求められていることでしょう。そしてもっとも明白な事実を持ち出して答えるというのが我々の古くからのやり方です。

(9)

千六百九十四年に海兵の大部分は陸上におり、そして法律に従って海軍工廠の近くに駐屯していました。そしてそこで通常の労働者が一日につき常に一シリング二ペンスを受け取っていたときに、一日につき六ペンスの奨励金を得て働いていたのです。そして海兵は海軍工廠の士官によって一般に若くて、その仕事に有能なので、同数の一般労働者よりも三割程度多くの仕事を迅速に処理すると認められています。そして六ヶ月もすると彼らの多くは一般労働者が一日につき二シリング支払われる仕事ができるようになります。

彼が軽蔑する海軍工廠の安全性については彼が夜回りと鐘の設置を提案し、全てが不完全であるとされています。しかし以前と同様に配置された海兵は一晩の夜回りに支払われる一人あたり一シリングと六ペンスの料金を不要にし、更にうまく仕事を成し遂げるかもしれません。というのは兵士はそれを義務の一つとして行い、引き立ててもらい昇進することを願って勤勉だからです。

この著者は海兵の食品、宿泊、及び、他の宿泊設備に関してやかましいように細心の注意を払っています。他の人々と同数の手足があるのでその有利性は彼らの労働に見いだされることを期待しています。

船が係船されているときには海兵のほうが水兵よりも船上で義務を果たすためには割安であることは否定できません。また、なんらかの攻撃を受けた場合には無防備で訓練も受けていない甲板長や少数の水兵よりは疑いなく有効に防衛することができます。

(10)

そのような戦力は恐らくはこの著者の嘲笑にも値しないようですがチャタム⁶の船の焼失を防ぎ、そして海軍工廠をより効果的に守れたかも知れません。というのは、私はその場所について断言されるのを耳にしたことがあります。それは、水兵と労働者はまだ一人

の敵も上陸していないときに、敵の攻撃を防衛するのではなく、できる限りの略奪と窃盗をはたらき、そして通り道にあった鐘を鳴らしたのです。なんの目的で彼らが鐘を鳴らしたのかは知りません。しかし、戦闘準備の太鼓が鳴ったときに逃げ隠れするような地上軍の兵士は一人もいないことは確信しています。

なんらかの必要が生じてすばやく船を艦装するように命令が下されたとき、海軍工廠の近くに駐屯している海兵は、水兵を召集しているあいだの時間の無駄を省き、その義務を遂行する能力があります。そしてその年、千六百九十五年には近くにいた水兵が不足していたのでチャタムの多数の大型船は海兵によって艦装され河を下りました。

最初の海兵連隊は著者が間違っただけで証言しているような、分散配置されているわけではありませんし、現在の四連隊の一つはベテランの士官と選ばれた兵士によって構成されています。そして残りが他の三連隊に配属されています。その結果、この議論は新しい連隊の設立ではなく、古くからの連隊を承認するための文句のつけようのない試みなのです。

全くの虚偽をかたくなに信じておられるこの殿方の目的、または、彼の性格になんと返答すればよいのか私には分かりません。しかしオランダが海兵連隊を廃止するというニュースは確認されていません。

この著者が我々をアドミラルティの保護下に位置づけられたとき、私はよりすぐれた委員会のおかげでなんらかの影響力が期待できるのではないかと思っていました。しかし彼は今、理解力を高めようとしておられるのですから、あらゆる寛容さを認めてあげなければなりません。

(11)

わが国の海軍力の必要な部分を持続することが王国の自由の破壊を招くと言われるならこの著者は先人の知りえなかった王国の自由を守るための新しい方法を見いだされたのでしょう。そして彼自身の偽装についてどれだけの自信がおありだとしても、我々は外観によって欺かれることはないことを確信していただくことを希望します⁷。彼の虚栄心と同様に彼の悪意はあらゆるところで明白です。そのせいでたとえ彼の主張になんらかの意味があったとしてもそれは我々にとってそれ相応に説得力が弱くなっています。またもし我々が彼の正直さを理解できるようなことがあれば、我々は全ての恐怖心を放棄できるかもしれません。

終わり。

あとがき

本稿は *A Short Vindication of Marine Regiments, In Answer to a Pamphlet, entitled, A Letter to a Member of Parliament, concerning the Four Marine Regiments*, London, 1699 の翻訳です。*A Letter to a Member of Parliament, concerning the Four Marine Regiments*, London, 1699 (以下、*A Letter* と呼ぶ) への反論として出版されたものですが、例によって著者名は不明です。

注

- 1 小林幸雄氏は『図説イングランド海軍の歴史』、株式会社原書房、2007年、28頁において、「海軍本部のような未熟で奇妙な言葉を当てるよりはよほどましである」として、「アドミラルティ」のままとされているので、ここでは小林氏の表記に倣っています。
- 2 Sir Francis Wheler もしくは Wheeler (1656-1694)。英国の海軍軍人。近畿大学全学共通教育機構『教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』第四巻第一号「十七世紀イングランド常備軍論争 (8)」、注5参照。以下『紀要』と呼ぶ。
- 3 Lord Orford, Edward Russell, 1st Earl of Orford, (1653-1727)。ウィリアム三世時代の海軍卿。1697年に伯爵に叙任された。訳語「海軍卿」については『図説イングランド海軍の歴史』、37頁参照。
- 4 Siege of Cork, コーク包囲戦。『紀要』、注7参照。
- 5 Kingsale もしくは Kinsale, アイルランド南部の港。1690年ジェームズ二世がウィリアム三世軍に敗退し、ヨーロッパ大陸へ逃亡した。
- 6 Chatham テムズ河南のメドウェイ河にある軍港。第二次英蘭戦争当時の1667年6月9日から14日においてオランダ艦隊に襲撃され、イングランド艦隊は大打撃を被った。
- 7 *A Letter* の最後に記されている「騙されたい人は騙されなさい」という言葉に対する皮肉の意味が込められています。